芦屋市企画部市民参画課課長 川口 弥良 様

芦屋市立あしや市民活動センター (指定管理者:(特活) あしや NPO センター) 事務局長 橋野 浩美

あしや部「飲食店経営者の方にお話を聞こう」報告

- 1 日 時:5月31日(日)14時~15時30分
- 2 会 場:Web (Zoom)
- 3 担当者: 橋野 浩美
- 4 参加者: 高校生4人(県立兵庫、須磨学園、神戸女学院、通信) 大人5人(池田氏、田畑氏、こぱん店主の堀江氏、毎日新聞阪神支局の 峰本氏、橋野)
- 5 ファシリテーター:田畑北斗氏 池田拓也(芦屋在住高校教諭)
- 6 内容
 - (1) 目 的: 芦屋の飲食店事情 これまでとこれからを伺う
 - (2) 内容:

【店舗を構えたきっかけやポリシーなど】

- ○堀江氏
- ・様々な店で修業を積み、2年前に芦屋に店を構える
- ・地域に根差したお店作りがしたい
- ・高級店のような価格帯にはしたくない
- ・チェーン店との違いは、味と人。コミュニケーションを大事にしている
- ・看板条例は経営側からすると商売しづらい
- ○高校生から質問
- ・芦屋で飲食店をするのは難しいのか
- どういった人がターゲットなのか
- ・気軽に入れるお店にしている工夫は?
- ・常連以外の集客には、繁華街に出店した方がいいのではないか
- ・芦屋に飲食店が少ないのはなぜか
- ・チェーン店など安い価格帯のお店が重宝される風潮についてどう思うか
- フードロス問題をどう考えているか
- ・家賃が安かったとのことだが、具体的にどのくらい?
- ・ 芦屋に出店する上で困ったことは?

【新型コロナウイルス後の運営】

○堀江氏

- ・営業時間の短縮で、売上げが激減。
- ・お弁当をいち早く開始し、SNS や常連さんへの手紙で告知。反応あり。
- ・自粛終了ぐらいからお弁当の売り上げが落ちてきたで、夜の営業を開始。
- ・困っている生産者と困っている地元の人のためにと、淡路島のサクラマス を使ったお弁当をひとり親家庭に 20 食無料提供。

○高校生からの質問

- ・お弁当という新しいことをすることへの不安はなかったか?
- →不安はあった。お客さんは戻りつつあるけれど、第二波が気がかりだが、何もしなかったら、何も生まれない。ダメだったら次を考えればいいと思っている。
- ・新しいことへの準備(弁当販売)はどんな感じだったか
- →関連業者に連絡をすると、弁当箱が売り切れのため、早急な確保を頼んだ。
- ・先が見通せない状況で仕入れはどうしているのか
- →予約がないと読めない。メニューの限定、仕込み量を減等、対応している。
- ・サクラマス弁当への助成金や補助はあったのか。
- →何もない。マイナスといえばマイナスだが、自分よりしんどい人の力になれればと思った。ひとり親家庭の声を聞くこともできたし、その後2回ほど食べにきてくれたご家庭もあった。
- ・客足の戻りはどの程度か?
- →まだまだ外食しづらい雰囲気。平日3割、休日5割といった程度。
- ・緊急事態宣言の解除の時期をどう思うか。
- →お金のことを考えなければ、根絶してからが理想だが、難しい。何より、お 弁当を売るだけだと商品を渡して終わりなので、お客さんとのコミュニケ ーションがなく楽しくない。常連さんとのやりとりがあると楽しい。
- ・自粛警察のようなことはあったのか。
- →電話と SNS で $2 \cdot 3$ 件あった。
- ・行政からの支援はどうなっているか。
- →国、県、市からそれぞれ補助がある。他にもあるらしいが全てが分かっているわけではない。4月に支払う消費税がしんどかった。
- ・テレビで見たような家賃が支払えず閉店した店はあるのか
- →仲の良い飲食店ではないが、店を閉めた話は聞いている。
- →少しでも赤字を減らすためにお弁当をしていたが利益はかなり少ない。580 円のカレーの儲けは100円もない。
- →逆に、通販などに踏み切り、通常よりも利益を上げている店があるが、通販 を行うには、保健所などのハードルが高く、踏み切れなかった。

7 振り返り:

- 1 店舗だけの話が全てとは思わないが、生の声を聴き、働く大変さを高校生が感じてもらえたようだ。
- ・経営するということは、お金だけではなく、人とのつながりを得ることでの喜び があるということも実感できたようだ。
- ・ 芦屋で働く、活動する様々な職種の方々の話を聞くことで、自分の将来を考える きっかけになっていっているように思えた。



